ナエドコロ

大小様々な触手に覆われた一室の空間。
その中には裸で絡み合う二人の少女の姿があった。
触手に拘束され、目隠しをされた大きな少女。
彼女のその魅力的な身体を執拗にまさぐる小さな少女。
熱気で蒸しかえり、汗だくな二人の身体だが、
その下半身は汗とは違うもので一際濡らし、音を立てる。

あっあっ！
イヤッ…お姉ちゃん、もうだめっ…
またきちゃうっ！
お願いっ、もうこれ…っ！
あっ
はぁっ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

はぁ
はぁ♥
ぷぴ
ぷぴ
ぷぴ

視界をふさがれ、大好きな姉を見れずに何度も中途半端に
イカされていた妹。暗闇から開放されてその目で姉を見た途端、
発散し損ねていた中途半端な性欲が一気に高まり押さえられなくなる。
声を荒げて喘ぎ、指を動かされる度に身体は悦び潮を噴く。
今自分が姉の玩具になっていると考えるだけで膣は濡れ、
次々と湧き上がってくる性欲を吐き出しては楽しんでいた。

■私も、ん・・・イきたくなってきちゃった・・・。
■・・・！触るっ！私がしてあげるよ！
お姉ちゃんのおまんこ・・・！
■んーん。そのままでいいわ。
でも、もちろんあなたには手伝ってもらうから安心しなさい。
そう告げると1本の長い触手が妹の顔に向けて伸びてくる。

あっ、やだイッちゃうっ・・・！
はぁ♥
妹の、犯される姿
見ただけで・・・っ
ふぁっ・・・〜〜っ!!
あっ！あ♥
んっ
ぶるるぶるるぶるる

姉がイクと同時に、咥えていた触手が射精をおこなった。
前触れもなく突然流れ込んでくる熱い精液。
粘々とした液体は思う様に飲み込めず、大量に噴き出た精液が
彼女の口から溢れ出して行く。
程なくして、狭い空間が生臭さで充満していった。

■っ――――んんっ……！

妹の秘所を弄る姉の手に、潮噴きとは違う水の滴りを感じた。
視線を落として見てみると、自分の手を伝いキラキラと黄金色の暖かい水が零れ落ちている。
それを見た少女はゾクゾクと何かが湧き上がり、子供が子供をからかう様にして妹を煽った。

いつしか触手に囲まれた空間はサウナの様に暑く蒸しかえり、
二人の身体から湧き出る汗が相手の汗と混ざり、
大粒の汗となって垂れ落ちていく。
責めていたはずの姉はたった2度の絶頂で足がプルプルと振るえ、
苦しそうに呼吸をしながらぐったりと妹の体にもたれ掛かかった。

転生したての小さな姉の身体では
まだ大人の快楽というものに順応できず、疲労だけが溜まっていた。
姉の弱気な発言に、もうこれ以上はやめておこう。
そう言われると感じた妹が突然身体を揺さぶりだした。
止まっていた姉の手に自分のまんこを擦り付け、
飲みかけだった精液を吐き、姉に見せ付けた。

きゃっ…！
ちょっと急に…！
あはっ♥何？
私を楽しませてくれてるの？
もう…
しょうがない子ね……
はぁ
ぶぼっ
ぶろっ
ぐぶっ
ぐぶっ
ぐぶぶ
ぐぶぶぶ

姉を喜ばせようとしたのか、自分の快楽のためだったのか・・・
妹の女を捨てた変態行為により、
興奮を抑えられなかった姉が3度目の絶頂を迎えた。
同時に、三度喉奥に注がれる大量の精液。
僅かに出来ていた呼吸の隙間も閉ざされ意識が朦朧とする妹だったが、
身体は悦び潮を噴き、全身を嬉しそうに弾ませていた。

魔界でひっそりと暮らす双子の夜魔族姉妹。
小さな頃からお互いが大好きで、いつの間にか始まったこの遊び。
いつしか妹は、大好きな姉が悦ぶことに悦びを覚え、
姉は妹の醜くよがり、苦しむ姿に快楽を覚えていった。
そして今日も、二人の欲求を発散するいつも通りの一日が始まる。
――――はずだった・・・。

■じゃーん！・・・って、うわぁ・・・・すっご・・・・・・
■ふぁあっ！お姉ちゃんっこれすごいっ・・・・！
んっ・・・・！どうなってるの・・・これ・・・！
　姉が準備をすると言いながら妹のクリトリスを刺激すると、突如むくむくと大きく膨らみ、男根へと姿を変えていった。そのあまりの逞しさに姉も驚き唾を飲んだ。

魔触虫と呼ばれる生物の力で妹にペニスを生やす事に成功した姉。
当初はこれを利用し、妹をもっと苦しめて自分の性欲を満たし、
優越感に浸ろうと考えていた。
しかし自分の足ほど太く、骨のように硬い熱く脈打つ肉棒に恐怖し
たじろいでしまう。そんなことを妹に悟られる訳にはいかない姉は、
その気持ちを押し殺して余裕のある態度を取り平静を装った。

小さな手で触れられただけでビクビクと反応してしまうペニスに姉が唇をつけてきた。

■――あっ！

唇が触れた瞬間、妹の全身を電気が流れるようにして快楽が走った。ペニスの付け根の辺りから尿意のようなものが押し寄せ、我慢する間もなく、妹はそれを姉に向けてぶちまけた。

驚いてすぐに唇を離した姉。
放たれた大量の精液は彼女の顔に飛び散り、男の匂いを撒き散らした。
その匂いに犯され興奮していく姉の顔は真っ赤に染まり、
甘い吐息が零れる。
少女の小さな身体がそれを欲しがったのか、
下半身がムズムズと疼き、じわりと濡れて滴りだした。

姉の気分も高揚し、目の前にそびえる肉棒から目が離せなくなる。
高まる鼓動を抑えつけ、
今度は大きく口を開いて大胆にそれにしゃぶりついた。
■あっ――！あぁぁあっっ！
しかし少女の小さな口ではとても相手にすることは出来ず、
亀頭の先っぽを咥えるのがやっとだった。

亀頭だけをしゃぶられ舐められるぎこちないフェラ。
気持ちは良いがお世辞にもうまいとは言えず、姉の経験の無さを感じた。
しかし大好きな姉が自分のために必死にしゃぶるその姿は愛おしく、
すぐに2度目の射精の瞬間が訪れた。

■お姉ちゃんっ・・・!イクっ、イクイクッ・・・!

■んぶっ、ぶちゅっ・・・ん、いいわ、出し――――っ!

■っ・・・！っ・・・・・！

流れてくる精液の量と勢いに苦しくなり、何度も口を
離したい衝動に駆られたが、負けず嫌いな彼女は懸命に喰らいつき
全てを飲み干した。
長い射精が終わる頃には
精液の味と臭いでその顔はとろけ、意識が薄れていく。

■あはっお姉ちゃん！もっと飲んでっ！私のミルクっっ！

■っぶっ――――――！

一頻り出し終えたはずのペニスが再び射精を始めた。
落ち着いたと安心していた姉に再び襲い掛かる精液は
すぐ口の中いっぱいに広がり隙間から溢れていく。

■もっと奥まで咥えてお姉ちゃん！もっと一緒に気持ちよくなろうよっ

手足を拘束され動かせない妹は
強引に腰を動かして姉の口にペニスを押し付けた。

■おっっっ――――っっっっ！

負けず嫌いな姉はそれにも耐えて咥え続けていたが、
いつしか飲む事を諦め、射精が終わるのをただ待ち続けていた。

■はーっはー・・・っ！

■ふー・・・ふぅー・・・・・・・っ

ケモノのように大量の精液を撒き散らしても、そのペニスは衰えることなくそびえ起ち、姉の口に突き刺さっていた。熱気と臭いでのぼせた姉は射精が終わったことにも気づかず、精液をこぼしながら逞しいペニスを咥え続けていた。

■お姉ちゃんまた出るよぉっ！飲んでッ！
■やっっ――――んぶうううううっっ！

普段は決して姉に逆らわない妹がペニスの快楽に飲まれ
大好きな姉を便器のように扱い、
我慢する事も躊躇う事もなく精液を口の中へ流し込んだ。
辱められ苦しめられ、妹に遊ばれ悔しくてたまらない姉は
堕ちそうになる意識の中でこの仕返しをしてやろうと企てた。

■これでよしっ・・・と。

妹がまた暴れないように、さっきよりもきつく地面に拘束させる。
寝かせた妹の股間からはいまだ衰えず逞しく反り返るペニスが
天高くそびえ立っていた。
姉は期待と不安でドキドキと胸を鳴らし、
妹の上にまたがり恐る恐るそれに触れていった。

■っんく―・・・!
■あはっ――――!

亀頭に自分のまんこをくっつけ、ゆっくりと体重をかけていく。
姉の綺麗な一本スジのまんこがぱくりと口を開いてペニスを咥えると、
まんこの感触を感じて、ペニスがビクビクと嬉しそうに弾んだ。
しかし、あまりにもサイズ違いのそれは穴を捕らえられず、
まんこ全体に擦られるようにして反り返っていた。

初めから無理だとわかっていた姉は、奥に刺さらない様にしてのしかかり、クネクネと腰を動かしペニスを刺激した。

■（このまま・・・んっ、おまんこの入り口だけで何度も何度もイかせてあげるんだから・・・！おちんちんってイク度に痛くなったりするんでしょ・・・？あはっ、今のうちにせいぜい楽しんでなさっ――――――・・・っ！）

淫魔とも呼ばれる彼女達の種族。
繋がってはいないものの、膣に精液をぶっかけられた事により
姉の身体が無意識に悦び始め、顔を真っ赤にして発情しだした。
■はあ・・・はぁ・・・ごめん、お姉ちゃん・・・もう無理だよぉ・・・。
目的を忘れて自分も快楽に溺れそうになるも、
幾度も射精を行った妹が
辛そうな声で嘆くのを聞いて平静を取り戻した。

余裕をかまし、優越感に浸っていた姉の身体を何かが掴む。

■っ・・・え？

■もう我慢できないのっ・・・おちんちんもっと、もっとしようよ・・・！

掴まれた方を見ると、拘束したはずの妹の腕が自分の腕を握っていた。

ゾッと・・・すぐに身の危険を感じた姉だったが、

何をする間もなく小さな身体は引き寄せられ、一瞬で貫かれた。

雌と雄による正しい交尾で姉と交わる妹。雌同士とは
比べられない程気持ち良く、ペニスで膣内を擦り子宮を突く度に、
心のどこかにあったもどかしさが晴れていく。
一方、力任せでレベル違いの物を挿入された姉。
処女膜が破けた痛みなど感じさせないほどの激痛が走る。
それでも姉は歯を食いしばり、泣き叫びたい気持ちを押し殺して
妹に負けたくない一身で耐えて見せた。

射精の瞬間が訪れると、妹はペースを上げてより強く姉を突いた。
早く姉の子宮に種を植えつけて、自分の物にしたい。
そんな感情ばかりが湧き上がり、大好きな彼女を乱暴に犯し苦しめる。
■くるっ！来るよお姉ちゃんっ！
■ぉおっっ――――！
そしてペニスを限界まで押し込むとそこで動きを止め
尋常ではない量の種を撒き散らした。

大好きな姉と交尾を行っている喜びが納まらない妹は、
大量の精液を姉の子宮に注ぎきる前に再び腰を突き動かしだす。
■おっ・・・！おぐっ――っ！
ペニスが膣内をえぐる度に、姉が苦しそうに濁った声を上げる。
きっとまんこが潰れる痛みで苦しんでいるに違いない・・・。
そうわかっていた妹だったが、姉を突く腰を止めようとはしなかった。

今まで姉に使われることが何よりもの快楽だと思っていた。
しかし大好きな姉を自分の手で苦しめ滅茶苦茶にすることが
それ以上に気持ちが良いものだと気付いてしまった妹。
姉を突き上げ、喘ぎ声をあげさせる度にこの上ない幸福感が
胸の奥から湧き上がる。
自分が気持ち良くなればなるほど、姉は苦しんでくれる。

■おおっっ――――〜〜！

射精しながらも激しくペニスを動かされ、呼吸がうまく行えない。
遂には壊れた体が悲鳴を上げるようにして潮を噴き
姉の体力を奪っていく。
姉が潮を噴くと、ただでさえ狭くきつい膣内がさらに締まり、
妹のペニスに千切れそうな痛みと快楽が襲ってきた。

ぶっぴゅ〜〜〜♥
イッた！
お姉ちゃんがイッたよ！
私のおちんちんで
お姉ちゃんのおまんこが
イッたよ！
ア…!!
ぶっぴゅ
ぶしゅ
ぶしゅ
ぶし

おっ
やめっ・・・
たすげでっ――!
おごっ
むりっ・・・!
も、もうだめっっ
とまってっ・・・!
おっ・・・
ヤダよお姉ちゃんっ
止まれるわけないよ・・・
もっと・・もっとしようよ!
ずぽん
ずぽん
ずぽん

姉の泣き言を初めて聞いた妹。
その普段は見せない弱弱しさがさらに性欲をかき立て、
もっと泣かせてやろうとペニスを子宮に叩きつける。
糸が切れてしまい、もう我慢の出来ない姉は
止まるどころか激しさを増すばかりの行為に脅え、
涙を飛ばしながらただただ苦しみ泣き喚いた。

■おねえちゃんおねえちゃんおねえちゃんおねえちゃん！
イクよおねえちゃん！イクッッッ・・・！
　少しの性欲も残さないよう、全力で姉を使ってペニスをシゴいた妹。
最後は子宮をえぐって突き上げ、そのまま直接中で射精を始めた。
泣き喚いていた姉はいつの間にか静かになり、
子宮に精液を注がれても
ぐったりと力の抜けた身体をビクビクと弾ませるだけだった。

あっはあ♥
ビクン
ビクッ
ビクッ
ビクッ

それから数時間、目を覚ましてから
抵抗しなくなった姉と抱き合いながら交尾を続けている妹。
姉のお尻を掴んでゆっくりと上下に動かし、じっくり膣内を堪能する。
数時間もの間一度も抜かれることなく挿さり続けるペニスにより、
姉の下半身は痛みも理解できないほどにマヒして壊れていた。

目は霞んで意識もハッキリしない姉だったが、
聞こえてくる妹の命令には身体が反応し、無意識に従っていた。
妹は人形やペットを扱っているかの様にして姉を褒めると、
ご褒美の精液を子宮に注いであげた。

子宮に精液を注ぎ終えると、姉が苦しそうに深い呼吸をする。
ガクガクと身体は痙攣し、目が上を向く。
■お姉ちゃんどうしたの・・・？
さっきから全然声聞かせてくれない・・・気持ち良くないの？
姉の声が聞けず、気持ちは良いが物足りない妹。
姉の舌にしゃぶりつきお尻を優しく撫でて物足りなさを紛らわす。

■そうだお姉ちゃん、こっちの穴も使おうよ。

■っ――――！

ふと思いついた妹は姉のお尻を鷲づかみにすると大きく広げた。
空気がお尻の中に触れて驚き、穴を閉めようとする。

■お姉ちゃんいつも恥ずかしがってこっちの穴は
舐めさせてくれないよね。こんなに綺麗でおいしそうなのに・・・。

■指じゃ物足りないもんね・・・。腕にしようか？

■んっ・・・んんっ！

　人形の着せ替えを楽しむかのようにして入れる物を考え、
一つ一つの提案に脅えて怖がる姉の表情を楽しんだ妹は
初めから決めていた物を動かし、姉のお尻の穴目掛けて突き刺した。

初めてお尻の穴を交尾に使われ、裂けそうな痛みに加えて中をほじられる気持ちの悪い感覚に苦しめられる姉。

不規則に動く3本の触手は激しく姉の穴を出入りし、反対側にいるペニスにゴリゴリと膣壁を押し付け刺激を与えた。新しい刺激と姉の反応で気持ち良くなった妹は無意識のうちに精液を漏らし、射精を行った。

あ♥あああ♥
ビュ
ビュ
ビュ

■あっ・・・!あぁっ・・・っ!

射精を終えた触手が1本ずつ汚い音を出しながら抜けていく。
全てが抜けると、姉が脅えた表情を見せながら身体を硬直させた。
必死に触手が使った穴を閉じようとするが、大きく開いたその穴は
ヒクヒクと疼くだけで閉じることが出来ない。
お腹はゴロゴロと鳴り出し、開いた肛門に空気が入る。
姉はすぐそこまで来ている存在に恐怖し、妹に助けを求めた。

必死に耐えて抑えようとしていた姉だったが
ゴポゴポと2、3滴お尻の穴から液体が零れ出した。
■もうだめっ・・・――――っあひっ・・・!
そして次の瞬間、お尻に出された精液が汚い音と共に
一斉に溢れて噴き出していった。
あまりの恥ずかしさに姉の顔は真っ赤に染まって行くが、
その開放感は心地が良く、辛そうだった表情は幸せそうに緩んでいた。

姉の醜態を満喫した妹は、もう一度その姿を見て楽しもうと
再びアナルに触手を詰め込み射精の準備をした。
きっと姉なら同じことをされると気付き
悔しそうな顔でこっちを睨んで抵抗してくるだろう。
そんな反応を期待していた妹だったが、姉は顔を伏せ、肩を震わす。
耐え切れない辱めにあい、我慢できずに泣いているのだった。

姉の泣く姿を見て心が痛くなり、自分まで悲しくなってくる。
嫌われたくない妹は何度も謝るが
姉はそっぽを向き、自分と目を合わせようとはしてくれなかった。
■あっ――ごめんお姉ちゃん、またイッちゃった・・・。
■っ――――！
その子供じみた反応が愛おしく、妹は再びまんこで達した。

抜かれるどころかどんどん奥へと侵入していく触手は
直腸にまで突き刺さり、その奥で蛇口から出る水の如く射精を行い
彼女の体内に精液を詰め込んでいった。
■やめっ・・・・・!おっ・・・・・!おぁっ!
どんどんと登って来る精液は少女の小さな体を一瞬で制覇し、
喉という細い通路で我先にと道を奪い合いながら、
顔の穴という穴から噴き出し飛び出していった。

ぶぼっ
ぶぼっ
ぶぼっ

射精はいつまでも続き、止まらない嘔吐は呼吸を困難にさせる。
死にそうな思いをする姉の脳裏に走馬灯のようなものが流れ、
今、自分がされている辱めや苦痛を、過去妹にしてきたのを思い出した。
自分がどれだけ酷いことをしていたのか身をもって体験し、
これが妹による自分への復習なんだと感じた姉は
心から今までの行為を反省して謝りだした。

■見て・・・お姉ちゃん・・・。
　妹は口を開け、姉の吐いた精液を口で受け止めていたのを見せつけた。
そして姉の口や鼻から垂れる残った精液も舐め取り、
ゴクリと飲み込んだ。
■私はお姉ちゃんに命令されなくったってこんなことするんだよ？
だって、お姉ちゃんのことが本当に大好きなんだもん・・・。
だから謝らないで・・・。

ぱ――――♡
ぱ――――♡
ぷ――――
ぷ――――
ぷ――――

ぷしゃーっ
ぶしゅるるるっ
ぶしゅるるるっ
ぷしゅるるるっ
ぷしゅるるるっ
ぷ

それから僅かな日が立ち――先日の交尾で多くの魔力を消費し疲労した姉妹は、しばらくの間眠りにつくことにした。
二人でいると発情するという理由から、別々の部屋で休息を取る。
あれ以来二人の中は進展し、変わらない日々が続きつつも
姉は妹を道具として見ることはなくなり、
互いを気持ち良くさせるために体を重ね合うようになっていた。
ペニスを生やした魔触虫も、あれ以来使用することはなかった・・・。

一人静かに眠る妹。
その周りを、何処からか集まってきた
大小さまざまな触手が取り囲み、彼女を拘束した。
触手の動きはどこか淫猥で、彼女の魅力的な身体を執拗に撫で回し、
触手を押し付けて感触を楽しみだした。

人型の雌の生殖器が何処に付いているかを理解しているのか、
1本の触手が迷うことなく少女の割れ目に伸びていく。
吸い付くようにくっつくと、そのままゆっくりとスジをなぞった。
性欲に敏感な淫魔の身体はすぐに反応し始め、
甘い吐息を漏らしながら下半身をジワジワと濡らしていく。

陥没気味の乳首に入り込み、
ほじくりこねていた触手がそのまま中で射精をする。
乳首から母乳のように噴き出る精液は辺りに飛び散り、
その独特な臭いで少女の鼻を刺激した。
射精を終えた触手が乳首から抜抜き出ると、
大きく勃起した乳首の先っぽが引っ張られるようにして顔を出した。

ス——♡
ス——♡
べん♡
べん♡
ぬぷ
ぬぷ
ぬぷ

柔軟な触手が身体に巻きつき、濡れた割れ目を掴んで広げた。

■んっ……！

いつもより豪快にまんこを開かれびくりと驚く。
実は射精されたのをきっかけに、すでに目を覚ましていた妹。
彼女はすぐにこれが姉による悪戯だとわかり、
あえて寝たふりを続けて楽しませてあげようとしていたのだった。

ビクン!!
ビクン
ビクン
ビクン

■お姉ちゃんもう待てない・・・早くおまんこ・・・！
おまんこ弄って、お姉ちゃ・・・・・ぁえ？
　もう我慢ができなくなった妹は寝たふりをやめ、
目を開けて姉を欲しがった。
しかし、側にいると思っていた姉の姿がどこにも見当たらない。
代わりに無数の触手が自分を囲み、矛先を向けてうねっていた。

あれ・・・？
お姉ちゃん？
ぷるぷる
ぷるぷる
ぷるぷる

ビクン
ビクン
ビクン

ドクン
ドクン
ドクン

射精を終えると今度は激しく前後に動き、交尾を始めた。
膣内に溜まった精液をかき回され、膣壁に塗りたくられる。
淫魔の身体は初めて本物の交尾を体験でき、
激しく乱暴に犯されながらも嬉しそうに触手を咥えていた。
辺りを改めて見渡しても姉の姿はなく、
触手たちが自らの意志で動き、襲われているのだと妹は気付いた。

あっ♥
やだっ♥
ヒラ♥
ビク
ビク
ボッ
ボッ
ボッ

ビクン
ビク
ビク
ビク

ぶっ!!…ぎゅっ
ぐぢゅ
ぐぢゅ
ぐぢゅ

ビクン
ぐぷぐぷ
ぐぷぐぷ
ビュッ
ビュッ
ぐぷる
ぐぷる
ぐぷる
ぐぷる
ぐぷる
ぐぷる
ビュッ
ビュッ
ビュッ

飛び散った精液や自分の噴いた潮に埋もれていく少女。
触手は射精しても止まることなく動き、
少女の敏感な部位を攻め続けた。
今にも飲み込まれそうになる気持ちの良い快楽に、
姉の顔を浮かべて何とか抵抗する妹。
姉との行為よりも気持ちが良いと認めるのは、
大好きな姉への裏切りだと感じて絶対に許せなかった。

ビクン
ビク
ビク
ビク

ビクン
ビクン
ビクン

ビクン
ビクン
ビクン

ぶぴゅ
ぶぴゅ
ぶぴゅ

射精が終わるころには元気よく喘いでいた少女も静かになり、
口から泡を噴きながら一生懸命に呼吸をしていた。
予想以上の快楽の連続に付いて行けず、意識が朦朧とする。
今の少女の姿は捕食をされている獲物のようで、
グネグネと動く触手に引っ張られて身体を動かし、
一際強い刺激が来る度に、擦れた声を漏らして鳴いていた。

ビクン
ビュ
ビュ
ビュ

おぼっ!!
ビクン
ぐぷぐ
ぐぷぐ
ぐぷる
ぐぷる
ぐぷる

ぶぴっ!!
どぷっ
どぷっ
どぷっ

はぁぁ♥
ビクン
ぉ♥
ぉ♥
ムクッ♥
ムクッ♥
ビクッ
ビクッ
ビクッ

はー♥
はー♥
ビクッ
ビクッ
ぐちゅ
ぐちゅ
どぷー
ぷぷ
ぷぷ
ぷぷ

■あ・・・そうだ・・・

霞んだ瞳の奥にうっすらと浮かび上がるモノ・・・
少女はそれを思い出し、幸せそうな笑みを浮かべた。

■お姉ちゃんがいた・・・！

爆発しそうなこの性欲を姉で発散したらどれだけ気持ち良いのか・・・。
想像しただけで鼓動が早くなり、今にも射精しそうになるペニスが
大量の我慢汁を溢れ出して期待した・・・。

ドクン
ドクン
ドロ
ドロ
ぺぺ
ぺぺ
ぺぺ

妹が襲われると同じ頃、姉の眠る周囲にも触手が集まり
彼女を囲んでを拘束していった。
何も知らない少女は気持ち良さそうに寝息を立て
ぐっすりと眠っている。

ぶっ
ぶっ
ぶっ

寝苦しさで目を覚ました姉だが、
寝ぼけている彼女は自分が拘束されていることにも気が付かず、
いつもと違う風景に違和感を感じながらも
ウトウトと重たいまぶたを下ろして再び眠りに就こうとした。

目を閉じると同時に、突然下半身に痛みが走った。
驚いた少女はとっさに足を閉じようとするが動かせず、
股の間に手を持っていこうとしても、腕も動かなかった。
慌てて目を開け再び周囲を見渡し現状を確認すると、
触手の群れに囲まれ拘束されていることにやっと気が付いた。

痛みのする下半身に目を向けると、おヘソの下辺りが
不自然に膨らんでいるのが見え、
少女は痛みの原因を理解した。
周囲から漂う異臭にも気が付き、顔をしかめる。

■なによ…これ…

理由はわからないが魔食虫が勝手に動いて襲ってきている。
一刻も早く抜け出そうとするのだったが、
挿入された触手は先端で子宮口をこじ開け侵入すると、
動くことなく射精を始めた。
驚いて暴れ出した少女をベッドに押さえつけ、
着実に中出しを済ませていった。

■な、なに・・・たったそれだけ？ふん、大したことないわね・・・！

先日のと比べると一回りも二回りも小さなサイズの触手。
射精の量も少なくなんとか耐えれた少女は余裕を見せる。
しかし、治癒魔法も使え再生力のある彼女の身体は、
妹に散々使われてしまった下半身を元の状態に戻していた。
さらに彼女の小さな身体にとってはその細身の触手ですら十分に太く、
やせ我慢をして反抗しているのだった。

■（このぐらいなら集中して魔力さえ溜めれば勝て……え？）

反撃しようとした姉だったが、自分と繋がっている触手の一部が異様に膨らんでいるのを見つけた。

それはモコモコと一部だけを大きく膨らませながら、こっちに向かって進んできているのがわかった。

そのまま進むとどうなるか、少女はまだ理解できていなかった。

ボーン
ゴリ
ドクン
ビク
ビク
ボゴゴ
ボゴ
ボゴ
ボ

■ひっ・・・・ぅぅっ・・・っ・・・・！

　得体の知れない物を体内に入れられ、少女は脅える。
下半身は裂け、お腹が破裂しそうな痛みに苦しみ悶えた。
　出されたそれは精液よりも熱く重たく、
どこか生き物のようにも感じられたが、
それが何なのかを知るのが怖くなった少女は、考えることをやめた。

苦しむ少女の目に、再び触手が膨らみ始めたのが見えた。

■っ――――!

サーッと血の気が引き、必死に拘束する触手を解こうと暴れだす。
動き出したそれは止める事などできずに、どんどん向かってくる。
近づく絶望に恐怖を感じ、脅えて泣き出した少女。
触手を強く握りしめて助けを求めるが、願いは叶わなかった。

再び体内にモノを詰め込まれ、声を失って苦しむ少女。
今度は二度・・三度と、容赦なく次々と子宮に詰められていく。
激しく痙攣しながら悶絶する少女のお腹は
血管が浮き出るほどパンパンに晴れ上がっていった。

全てを詰め込み終えた触手は少女の穴から抜ける。
同時に少女が失禁し、白いシーツが黄色く染まっていった。
穴という穴から水を噴き、ぴくぴくと力なく弾む。
死ぬほどの痛みはさすがの淫魔でも快楽と捕らえられず、
痛みと苦しみだけを存分に味わい瀕死に追いやられる。
そんな彼女の苦しみは、まだ始まったばかりだった・・・。

ぶるっ
ぶるぶる
ぶるぶる
ぶるぶる

少女のお腹に出されたモノの正体は触手の卵の、卵。
母体となった彼女の魔力を吸い取りながら成長し、
立派に成熟した魔触虫の卵へと姿を変え、産まれようとしていた。
しかし、少女の母体として適応してない身体では
体外へ産み落とすことが出来ず、顔を出したままつっかえてしまう。
少女は鼻息を荒くし必死に出し切ろうとするが、下半身から
あらゆる水を排出するばかりで、自力で産む事ができなかった。

見かねた触手が顔を出していた卵を掴み、
一度少女の体内へと突き戻した。
ビクンと一際大きく跳ねて潮を噴く少女。
パンパンに張ったお腹に触手も追加され、その形をくっきりと
浮き上がらせる。
出産とは呼べないその拷問に、少女は泡を噴き生死を彷徨った。

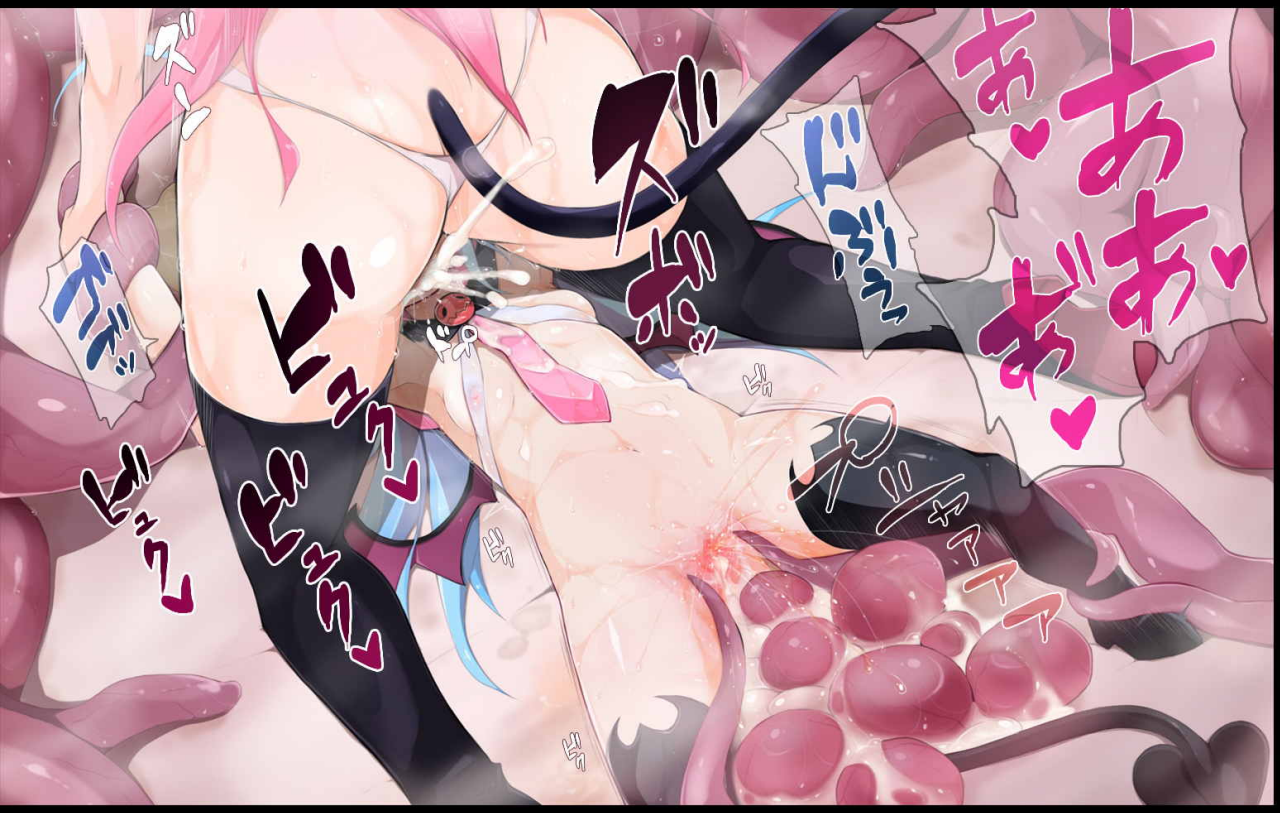
ぶっ…!!
ぶぶ…!
ビュ
ビュ
ビュ

母体のことを一切考えない行為は成功し、
大きな音と共に少女の穴から脈打つ卵を抱えた触手が抜け出した。
大きく開けられた少女の穴からは精液が釣られて噴き出し、
止めどなく溢れシーツの上に溜まっていく。
出産に成功した姉は身体が切断されるような痛みを感じ、
自分が生きているのかさえわからない、瀕死の状態だった。

ぺちゃ
ぺちゃ
ぺちゃ

■お姉ちゃん大丈夫…？
気を失う姉のもとに、妹がやってきた。
■あっ……あ……
　微かに妹の声が聞こえ、意識が戻っていく。
その目で妹の姿を確認できた姉は、助かる喜びに涙を流した。
妹がなぜか自分の顔にまたがり、口に何かを押し付けてきたが…
それでも姉は助かると信じていた…。

はーい♥
のし
ぐっ
きゃあ――♥
ぷにぷに
ぷにぷに
ぷにぷに


あぁ♥
あぁ♥
あぁ♥
ズボッ
ズボッ
ズボッ
ビュクン
ビュクン
ビュクン

ズン
はぁ♥
はぁ♥
ぶっ
ぎゅ
ぎゅ
ぶっ
ぶっ
ぶっ

先日のもどかしい姉のフェラや浅いまんこと違い、
喉奥を使った交尾はペニス全体を刺激でき、
余すことなく精液を搾り出せた。
太く長いペニスは喉奥を突き抜けて
直接胃に精液を流し込む勢いだった。

はぁ♥
はぁ♥
はぁ〜〜〜♥
ブルル♥
ブルル
ごぼ
ごぼ
ごぼ

まだまだ出し切れない性欲。
お尻を姉の顔に叩きつけながら、ペニスを激しく出し入れし
溜まっていた精液を次々に発射していく。
突く度に姉とペニスの混じった音が聞こえ、妹を気持ち良くさせた。
■はぁっはぁっはぁっ！イクイクイクっ！イクよお姉ちゃんッッ！

ふぁ♥
ぶぶぶぶっ
ぶぶぶぶっ
ぶぶぶぶっ

■お姉ちゃんのおまんこだ・・・あぁ・・・・・こっちでも良かったな・・・・
でも、ここ狭くておちんちん根元まで入らないんだもん・・・。
　ペニスを扱きながら、目の前にある姉のまんこを
手馴れた手つきで愛撫し、ウットリと見つめる妹。
吊るし上げられた下半身はぴくぴくと反応を始め、愛液が溢れ出る。

溺れて苦しむ姉の身体を潮を噴かせてイかせた妹。
■あは！お姉ちゃんがイッた！私も、私もイクよ、一緒にっ・・・イクッっ！
自分も続いて射精を行い、
姉と一緒に気持ち良くなれる快感を満喫する。

ハァ♥
ぷゅ
ハァ♥
ゴクン
ゴクン
ハァ♥
ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ

ぶる
ぶる
ぶる

■お姉ちゃん便器みたい・・・。私専用の便器・・・。
私のおちんちんだけが使っていい、お姉ちゃん便器・・・・・。
姉を自分のモノとして考えるだけでゾクゾクと興奮が湧き上がる。
ペニスはさらに熱を帯びていき、膨張して姉の口に詰まっていった。

■はぁっはあっはあっはあっはあっ！

吐き出しきれない興奮に、さらに激しく姉にペニスを叩きつける妹。息ができず弱っていく姉は段々と反応が薄くなり、妹もそれを感じた。

■大丈夫だよお姉ちゃん！お姉ちゃん強いからっ！5分ぐらい呼吸できなくったって生きられるよねっ！大丈夫だよ！

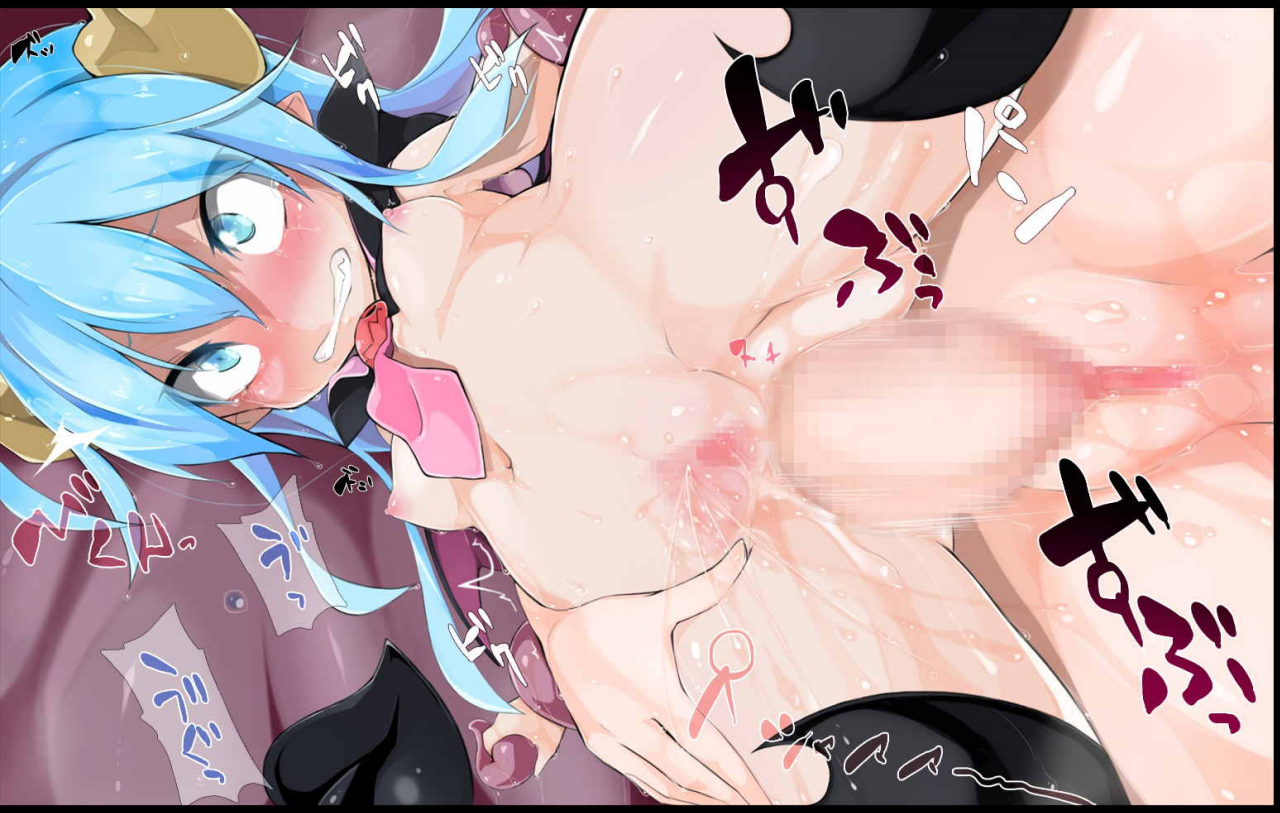
姉なら大丈夫だと自分に言い聞かせ、妹は息を荒立て姉の口と交尾を続けた。

■イクイクイクイクイクっ！お姉ちゃんっっ！これで最後だから！全部飲んでっ飲んで！私のおちんぽミルクゥゥゥゥゥッッ！

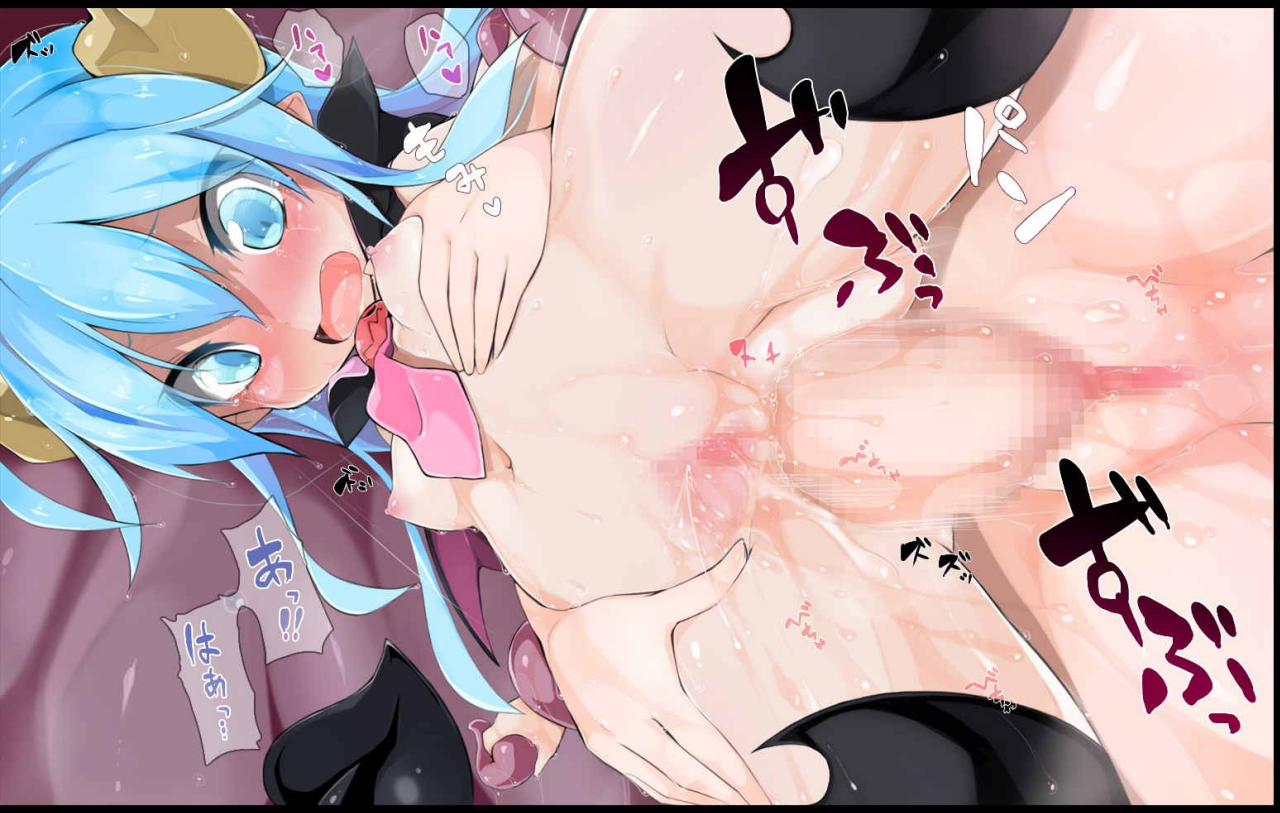
射精が始まると大きな音を立てて姉の口から精液が噴き出した。吊り上げられた下半身は激しい痙攣を繰り返し、潮を噴く。

１５分近くもの間延々と喉を犯され、胃に精液やおしっこを注がれ続けた姉は早い段階で気を失い、本物の便器のように役目をまっとうしていた・・・。

ゴクッ
ゴクッ
ゴクッ


ぶっ
ぶっ
ぶっ

■お姉ちゃん、相変わらずおっぱい大きいね。
お姉ちゃんの年齢でここまで膨らんでる子なんて、いないよ。
　軽々と持ち上がる姉を後ろから犯しながら、
身体を隅々までまさぐり感触も楽しむ妹。
まだ発育途中の小さな胸を揉むと、
自然とペニスが反応していきり立ち、姉をさらに貫いた。


パン
ぎゅぶっ
ぎゅぶっ
ぐぐっ
ぐぐっ
ぐぐ

■お――――――っ・・・けふっ！

まだまだ出し足りないペニスは早々に射精をはじめ、
姉の体内に精液を巡らせた。
出された精液を口から吐きそうになる姉だったが、
少し勢いが足らず、吐き出す直前で詰まり空のえずきをした。

ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ

■ごめんねお姉ちゃん、中途半端が一番辛いよね。
次はちゃんと、お姉ちゃんの口まで精液届けるから！
■やっ！だめっ、ヤダだからっ！止まっ・・・って！イタイッ・・・！
　1発目が物足りなかった妹は突くペースを上げ、姉の小さなお尻に腰を叩きつけていく。
お尻の穴は太いペニスに合わせて広がり、裂ける痛みに苦しんだ。

ずぶっ
ずぶっ
ぶりぶり
ぶりぶり
ぶりぶり

ズズズ
ズズズ
ズズズ

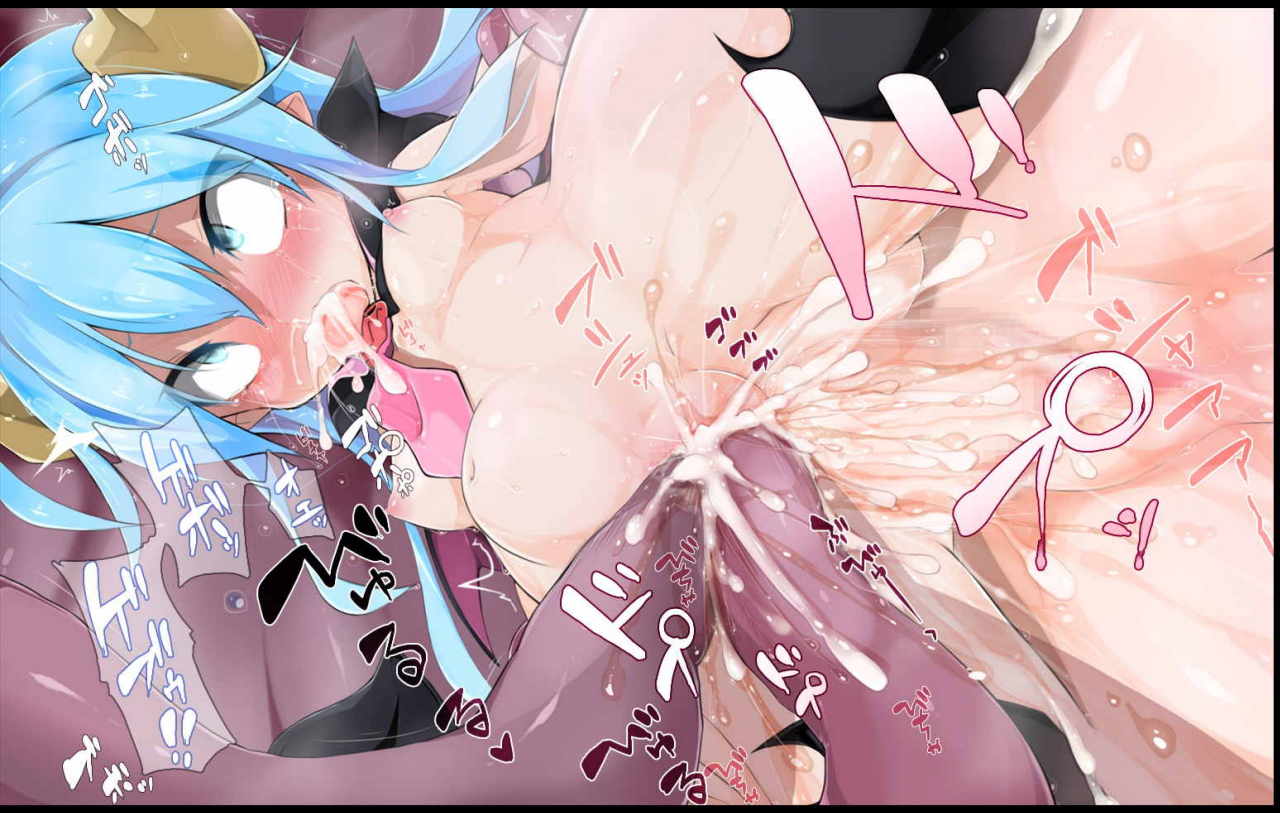
■お姉ちゃんが我慢したりするから、全然精液吐かせられなかったよ？
■っ――ぁああっっ！
　思い通りに行かず、見てて楽しくない妹は
桜色の小さく勃起した姉の乳首を強く抓り泣かせる。
その行為はとても妹とは思えず、本当に悪夢を見ている気もしたが、
身体に走る痛みに現実だと教えられた。

ズニュ
ぐぐぐ
ぐぐぐ
ぐぐぐ

ぐぐ
ぐぐ
ぐぐ

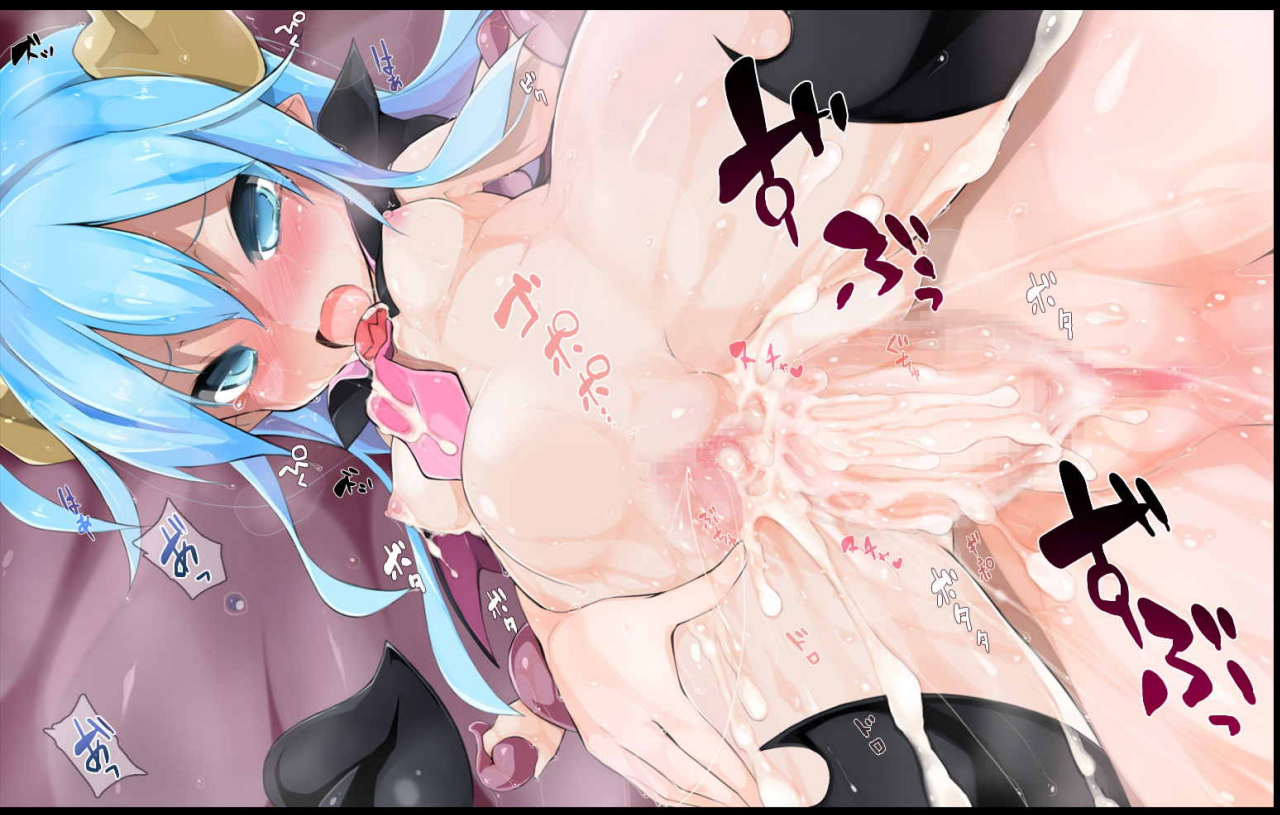
ぎゅぎゅっ
ぎゅぎゅっ
ぎゅん
ぎゅん
ぎゅぎゅっ
ぎゅっ
ぎゅっ

ドピュッ!
ドピュッ
ドピュッ
ドピュッ


ドボッ!!
ドボッ!!
ドボッ!!

■もうっ…！やめ、て…！ゆるしてっ！

目を覚ましてから休むことなく続く悪夢。
まだ心のどこかで妹に助けてもらえると淡い希望を抱き捨てきれなかった姉。しかし、性欲の捌け口として使われ苦しめられる内に、その願いは叶わないと悟ってしまう。
今後ろで犯しているのが本当に妹なのかどうなのかさえ、双子の姉である彼女にもわからなくなってしまった。


ずぶっ
ずぶっ
ぶちゅ
ぶちゅ
ぶちゅ

ぶぶぶぶ
ぶぶぶぶ
ぶぶぶぶ

ずぶっ
ずぶっ
ぶしゅ
ぶしゅ
ぶしゅ

■あ・・・そうだったお姉ちゃん・・・・ごめんね・・・・・・。
　妹が何度目かわからない射精を始めると、ポツリと呟いた。
■いくらお尻の穴に射精したって、赤ちゃんなんて出来ないよね・・・。
気持ち良くて面白くて、つい遊びすぎちゃった・・・。
　この数時間、何の目的も無くただ姉を犯して遊んでいたと言う妹。
最後のお尻での射精を終えると、
姉を拘束していた触手たちが外れていった。

ドピュッ
ビチャ
ビチャ
ビチャ

拘束していた触手が解かれると
姉は崩れ落ちるようにして倒れこんだ。
妹はお尻の穴からペニスを抜き、まんこに挿入しなおすと
大きく開いた子宮口に向けて一気に突っ込んだ。
■あぁっ・・・お姉ちゃんのおまんこ・・・おまんこっ！

久しぶりに味わう姉の膣内は口やアナルよりも遥かに気持ち良く、
本物の交尾をしていると感じさせた。
悦ぶ妹はさらにペニスを太く膨らませ、
膣壁に埋もれながら子宮に亀頭を叩きつける過激な交尾で
すぐに射精をおこなった。

妹は動きを止め、子宮口に強くペニスを押しつきながら
射精の余韻に浸りつつ最後の一滴まで注いでいく。
息も絶え絶えで力なく痙攣する姉。
お腹は重くなり、子宮が押し潰されているのを感じる。
そのまま子宮の口を裂いて
さらに奥へと入って来そうなそれに、姉は脅えた。

■ううん、まだわからないよね・・・もっとしっかり
全部奥まで入れて交尾しなきゃダメだよお姉ちゃんっ・・・・！
　姉が恐れていた通り、
妹は開いた子宮口に亀頭をねじ込み
その奥を目指して押し込みながら腰を突き出した。
下半身を串刺しにされる痛みに、姉の悲鳴が響き渡る。

ぶっ
ぶっ
ぶっ

子作りを目的とした正しい交尾は、子宮の中にたっぷりと精液を詰め込むことにより確実に孕むと予感させた。

目的も達成でき、

このまま続けてもせっかく子宮に出した精液が溢れてしまう。

そう感じた妹は名残惜しそうに子宮からペニスを抜き、交尾を終えようとした。

ブツブツと何かを言いながらペニスを抜こうとしていた妹。
しかし突然勢いをつけ、
再びペニスを突き刺し子宮を貫いた。
助走をつけた分、その勢いは増し奥の壁にぶち当たる。
和らいだ痛みが再び鋭く刺さり姉の濁った声が響くと、
結合部から中に出した精液が溢れ出し地面に落ちていった。

ぶくっ
ビクン
そうだよお姉ちゃん！
今から後１０００年間…
やめ…
あっ
ずっと交尾していれば
問題なんてないよっ！
ぶぢゅ
ぶぢゅ
ぶぢゅ

ぶっ
ぶっ
ぶっ

■あっぁあ――っ！お姉ちゃんが気持ち良すぎて、んんんっ！
おちんぽ止まらないっ・・・！精液止まらないのおおぉっ！

もう十分に性欲を吐き出し切れていたペニス。
しかしこのあまりの気持ち良さに交尾を終わることが出来ず、
空っぽのペニスは無理をして精液を作り、飛ばしていた。
そんな無理が祟ったのか、射精が始まると流れるように精液は出続け、
姉という身体のコップになみなみ注がれていく。

おおおっ…
はあぁ♥
ぶぴぴぴ

■あはっ・・・！あはぁっ！お姉ちゃんっお姉ちゃんんんっっ！

■っ――――――――――

　制御のきかないペニスに構うことなく、妹は交尾を続ける。
次々に湧き出し発射される精液は少女の身体に収まりきらず、
結合部から噴き出し漏れていく。
しかし排出の間に合わない精液はどんどんと溜まり、
少女の体内を広げて居場所を作っていった。

あぁ♥
あぁ♥
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ぶしゃ
ぶしゃ
ぶしゃ

ドピュ
ドピュ
はぁ――――…♥
はぁ――――…♥
ヒク
ヒク
ヒク

身体の水分が無くなりそうなほど射精をし、
肩で深い呼吸をしながら呆ける妹。
しかし姉の膣内が脈打ちペニスを絞めると
何かを思い出してゆっくりと腰を動かし、交尾を再開した。
そして何度も何度も、壊れたペニスは姉の中で射精する。
――そしてそれはとても長く、姉が妹の肉便器として床に伏せ
精液に埋もれ続けてから数え切れないほどの日が経った…。

ブリブリ…
ぶちゅぶちゅ
ぶぶ
しゃ
あ
あ
ぶぶ
ぶぶ
ぶぶ

■お姉ちゃん・・・ねぇ、どうして・・・？

■っ・・あがっ・・・・ぁあっ・・・・・！

　姉が肉便器となり自我を無くし始めたある日。
妹は苛立った様子で姉を見下し、触手に力をこめて絞り上げていた。
首は強く引っ張り上げられ、膝が浮いている。

■ぐるし・・・・ィ・・・タス、・・・テ・・・・！

■助けて・・・？お姉ちゃん、本気で言ってるの・・・？

■私を裏切って、こんな事しておいて……！

■あぁぁっっっ――――――！

　口答えをしてくる姉に苛立ちが抑えられなくなり、
妹は大きく孕んだ姉のお腹に尻尾を巻きつかせて力いっぱい締め付けた。
すると大量の粘り気のある水が少女のまんこから噴き出し、
その奥から外に向けて何かが顔を覗かせた。

ぶしゃあああ
ぶしゃ
ぶしゃ
ぶしゃ

ぶしゃあああ
ぶしゃ
ぶしゃ
ぶしゃ
ぼっ
ぼっ
ぼっ

おっ はぁ〜〜〜

ぶぶぶ

ズズズズ
いやぁっ!!
おっ
ぐぐぐぐ
ぐぐぐぐ
ぐぐぐぐ

おっ…
ぶぢゅっ
ぶぢゅっ
ぶぢゅっ

あっ
あっ…
あぁっ
ぎゅぅ…
ぎゅぅ…
はぁ
ぎゅぅ
ぎゅぅ
ぎゅぅ

ぶしゅっ
ぶしゅっ
ぶしゅっ

■おつ……お……っ……！

待ちきれなくなった数万といる触手たちが
たった二つの少女の穴に群がり、競うように侵入し交尾を行う。
為す術なくただ犯されるだけの姉。
身体は激しく上に突き上げられ、無意識のうちに顔を上に向け始める。
呼吸が出来なくなり一層顔を赤らめると、
少女の口から1本の太い触手が飛び出してきた。

ビュク
ビュク
ビュク

■んぶっ――――っ！んっっ――……！っ……！っっ――……！

　1本抜けては新しい1本が突き刺さり、1本が射精を終えると別の1本が射精を始める。
お腹ははち切れそうなほど膨れ上がり、足元には大きな池ができていた。
　自らの力では一切身体を動かすことの出来ない少女。
小さく細いその身体は、
太い触手たちに親の敵のように使われ続けた。

ビュク
ビュク
ビュク

ハァ
ハァ
ハァ

ぶびゅっ
ぶびゅっ
ぶびゅっ

■おぶぅぅっぅぅっっ――――――！

体内に詰まった精液を押し上げながら、
再び触手が少女を貫き口から飛び出す。
押し上げられた精液は涎と共に口から垂れ落ち、小さな胸垂れていく。
膨らみかけのその胸は吸い上げられ続けて真っ赤に腫れ上がり、
先端は千切れそうなほど
上下左右に激しく引っ張られては揺らされた。

ボッ
ボッ
ボッ

触手を操っていたはずの妹の姿はもう何処にもない。
それなの動き続け、姉を貪る触手たち。
これが全て魔触虫による母体確保の為の行為だったとは
彼女たちには知る由もなかった。
触手を利用して遊ぶはずだった姉は、いつの間にか逆に利用され
彼らの苗床にされてしまうのだった。

■お姉ちゃんっ！ごめんね・・・ごめんね・・・！

初めに魔触虫を妹に使用した時、それは彼女の身体に取り憑いた。
抑えきれない性欲を発し、雌を黙らせるための男根に姿を変える。
魔力の高い魔族と交配し、生き残るための手段だった。

■私が間違ってた・・・・！お姉ちゃんのおまんこ無しじゃ・・・私もう生きれないのっ・・・！おちんちんがずっとずっと疼いて、お姉ちゃん犯したくて我慢できなかったのっ！

■あぁああ出る出るでりゅうっっっ！お姉ちゃんのおまんこの中におちんぽみるくいっぱい出りゅうぅうううううっっっ！

一度取り憑かれると性欲だけが止め処なく沸きあがり、繁殖したいという気持ちに襲われる。

種付けされてしまった雌の身体は母体と認識され、体内で魔力を吸い取りながら卵を作れる身体に変えられてしまうのだった。

ビュク
ビュク♥
ドプッ
ビク
ビク
ビク

■はぁ・・・・はぁ・・・・お姉ちゃん・・・っお姉ちゃんん・・・・・！
きもぢィイ・・・・・・！

本来ならば、一度種付けされた雌はその後種馬には棄てられ、
触手に拾われ死ぬまで卵を産まされる。
しかし妹の姉を思う気持ちが強すぎたのか、妹は他の雌を襲うことなく
姉だけを犯し、姉だけにしか種を植え付けなかった。

おお・・・
ぶぎゃ・・・
ぶぎゃ・・・
ぶぎゃ

■っ――んぁあっ！お姉ぢゃんっ！私達の子が・・・！産んだ触手がっ・・・！
一緒にっお姉ちゃんと交尾したいって・・・・・・！

触手は一つの卵から何百本と生まれ、その数を増やしていく。
多くの雌を母体にするのは、それら触手たちを1本でも多く
処理するためだった。

そのため、母体を1匹しか確保できないと言うことになれば、
たったその1匹で何百万本もいる触手の相手をする事になるのだった。

■おぶぅぅっっっ――――――――！

■あはっ・・・！お姉ちゃんすごひっっ・・・！

あはっ！お姉ちゃんお姉ちゃんお姉ちゃん！

少女の小さな穴に無数の触手が次々に咥えさせられていく。

非常に太く長い触手は人型の雌との交尾には適しておらず、

小さな姉の身体は瞬時に貫かれ、触手が口から飛び出した。

ボンッ
ボンッ
ボンッ

■んっっ・・・ふぅぅうっっっっ――――！

妹が姉の子宮の中で射精を始めると
まわりの触手たちも一斉に射精を始める。
とても姉一人の身体では全ての触手を穴に入れることは出来ず、
溜まった性欲をぶつける的のない触手たちは
種馬となった妹の穴にも侵入し、その中で射精を行っていた。

■はぁはぁっ・・・・！見てお姉ちゃんっ・・・私、お姉ちゃんと一緒に
触手の子達に犯されてる・・・！
お姉ちゃんのおまんこズポズポ犯しながら、ハァ・・・っ
私のおまんことお尻の穴も・・・っ
お姉ちゃんの産んだ子達に犯されてるのっ・・・！
嬉しいっ・・・こんな幸せなことないよお姉ちゃんっっ！
お姉ちゃんも気持ちイイよね・・・！私のおちんちんキモチイイよね・・・！

あっ♥
ハァ♥
ハァ♥
はぁ♥
ハァ♥
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

喋る事の出来ない姉にペニスを突きたてながら興奮する妹。
自分の下半身も姉同様に無数の触手に犯され
激しい痛みを伴っていたが、寄生されたその身体は
徐々に触手たちの快楽が自分にも伝わるようになりだしていた。
■あっあっあっあっ！なに、これっ・・・はぁあっ・・・！
身体裂けそうなのにっ・・・！痛いのにぎもぢいいっ！
お姉ぢゃんの全部を味わってる感じがするのぉっっ！

あはぁ♥
ぶぢぶぢ
ぶぢぶぢ
ドピュッ
ドピュッ
ぶぢぶぢ
ぶぢぶぢ
ぶぢぶぢ

■ぉっ、おっっ！・・・ぉぁっ・・・！っんぼっっ・・・・！

止まらない射精が続くと妹の鼻の穴から精液が漏れ出す。
姉同様、出された精液が喉を駆け上がり口に溢れてきた。
妹は目の前の大好きな姉を自らの嘔吐で精液まみれにさせたくなく、
必死に口を硬く閉ざして堪えるが、
えずく度に隙間から漏れ姉の顔に垂れ落ちていく。
二人のお腹はどんどん大きく膨らみ、やがて重なり合っていた。

ドピュ
ドピュウ
ぶびゅく
ビクッ
ぶっ
ぶぼぼ
ゴクゴク
ゴクゴク
ゴクゴク

■ぉぼっ……ごふ……んんぶぅうぉぇえ……

■ぐぼ……っ……ゴポ……！

　射精が終わる頃には妹の意識も薄れ、
自然と動いていたはずの腰がその動きを止めていた。
口からは吐いても吐いても止まることなく精液が零れ、
触手が抜けて開いたままの姉の口の中に
ドロドロと糸を引きながら落ちていった。

寄生した種馬の身体が疲労のためか重くなり、動かせなくなる魔触虫。
彼は交尾を再開させようと、妹のお尻に大きな触手を突き刺した。
■んひっっ――――！
ビクリと反応して飛び起きる妹。
挿入された触手は強くお尻に吸い付き、
妹の身体を前後に引っ張るようにして動かし
固定された姉のまんこにペニスを出し挿れさせて交尾を続けた。

ズニュ
ぶん
ぶん
ぶっ
ぶっ
ぶっ

ズン
ズン
ズン

ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ

ビュク
ビュク♥
ビュク♥
ビュク♥

数時間、
無我夢中に交尾を楽しんだ妹は再び疲れ果て、腰を止める。
魔触虫も全てを出し終えたのか、
妹のお尻から挿入した部分だけを残して離れていた。
　太い触手を咥え合ったままの姉妹。
潰される姉は苦しみにもがく事も出来ず、僅かにできる呼吸をただ行う。
妹は執拗に姉と乳首を擦り合せ、余韻を楽しんだ。

魔触虫が交尾を終えるのを見届けると
触手たちが一斉に飛び掛り、二人の奥へと侵入し詰まっていった。
■んんんんんっっっ――っ！
■っ――――――…！
中をえぐりながらほじくられて掻き回され、
1本ですら苦しい少女たちの穴に隙間なく次々と
詰め込まれていった触手は、乱暴に中で暴れまわり交尾を楽しむ。

ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ

ズッ
ズッ
ズッ

ズッ
ズッ
ズッ

ぶるるっ
ぶるるっ
ぶるるっ

■あっ・・・、あはっ・・・・！お姉ちゃん・・・おねえちゃん・・・・！
やっと・・・！やっと私の番がきたよ！・・・っお姉ちゃんを犯す番・・・！
私のおちんちんもキモチ良くしておねえちゃん！
あぁぁっ！だいすきっ、お姉ちゃんだいすきぃっ！
お姉ちゃんっ！お姉ちゃんお姉ちゃんおねえちゃんおねえちゃんおねえちゃ
　何故こうなってしまったのかはわからない。それでも大好きな姉を
好きなだけ犯せる毎日に満足し、妹はいつまでも幸せに暮らした・・・・。